

Bulletin 2017 5



COLONNADE

特集1 ●アーキテツツ・ガーデン 2017 建築祭

ARCHITECTS GARDEN 2017 社会と共にある建築祭月間 2
メインイベントのご案内/メインシンポジウム「建築的思考の可能性」
委員会サミット/AGパーティー/AGの歴史

特集2 ●JCCA × JIA協働シンポジウム

多様性と融合 4
亀井尚志 三菱地所
大崎将大 日本設計
東海林孝男 三菱地所設計

FORUM

覗いてみました他人の流儀

指出一正氏に聞く「自分ごととして関われば どの地域もおもしろい」 6
指出一正 『ソトコト』編集長

温故知新

石井和紘 異聞 10
岩本弘光 岡山県立大学/岩本弘光建築研究所
抱負を語る 「建築家」と呼ばれるために 11
鎌田賢太郎 鎌田建築設計室
抱負を語る 国内から海外へ 11
福田朋宏 日建ハウジングシステム

委員会活動報告

〈保存問題委員会〉保存問題委員会の要望書提出について 12
安達文宏 安達文宏建築設計事務所
〈アーバントリップ実行委員会〉第82回JIAアーバントリップ 14
三沢 護 建築設計
〈交流委員会〉2016年度委員会活動報告 15
天神良久 ケー・デー・シー

地域会だより

〈新宿地域会〉東京地域連携会議のあり方 16
小倉 浩 小倉設計
〈文京地域会〉NPO法人文京建築会の発足について 17
野生司義光 野生司環境設計

部会活動報告

〈建築交流部会〉前川建築と地方都市の力 18
木村 智 ニッテイ建築設計
〈メンテナンス部会〉マンションの大規模修繕30年の軌跡 20
今井章晴 ハル建築設計

日本版CABEを考える

近畿支部におけるコンペ開催支援の取り組みとその効果 21
荒木公樹 空間計画

BACKYARD

書籍紹介『くらしつづける街と建築へ 2016年 熊本地震 被害記録と提言』 22
安達和男 AAA (Adachi Archi Associate)
広報からのお知らせ 23

ARCHITECTS GARDEN 2017

社会と共にある建築祭月間



開催期間：2017年6月、およびその前後数日

主催：JIA 関東甲信越支部

関東甲信越支部全域を1ヵ月にわたって“建築”で彩るアーキテクト・ガーデン (AG)。建築家やJIAの多彩な価値や活動を広く社会に発信することを目的に、1990年代にスタートしました。

本年は、社会に向けたアピール、そして会員にとって価値ある場といたく、パワーアップして開催いたします。地域会・委員会・部会によるイベントはより充実し、7月7日のメインイベントは3部構成でまいります。

1人でも多くの方に参加いただき、一緒に盛り上げてまいりましょう。

(アーキテクト・ガーデン実行委員長 鈴木利美)

メインイベント

2017年7月7日 (金)

プログラム

- | | |
|----------------|-------------|
| (1部) 委員会サミット | 13:00～15:00 |
| (2部) メインシンポジウム | 15:30～18:00 |
| (3部) AGパーティー | 18:00～20:30 |

※講演議題・各プログラムの時間は今後変更される可能性があります。

開催概要

- 会場：【委員会サミット・メインシンポジウム】建築家会館本館 1階ホール
 【AGパーティー】JIA 館 1階建築家クラブ
- 会費：【メインシンポジウム】会員2,000円/一般・学生 無料 定員：120名
 【AGパーティー】会員・一般・学生 3,000円 定員：60名
- 主催：JIA 関東甲信越支部 アーキテクトガーデン実行委員会
 WEB サイト：<http://www.jia-kanto.org/AG2017/>

2部 メインシンポジウム「建築的思考の可能性」

AGの華であるメインシンポジウムは、「建築的思考の可能性」をテーマに、移りゆく時代において建築家の職能を改めて問い直し、社会でどう捉えられ、その価値は何か、また縮小社会において如何に発展させるのか、そんなことを考える場にしたいと企画しました。ヒントをお持ちであろうお三方に登壇いただきます。

ライフスタイル提案型事業からは、代官山蔦屋書店の初代店長であり、CCCデザインカンパニー執行役員として全国の書店も担当されている田島直行氏をお招きし、知性、感性、好奇心、楽しさを満たしてくれる新たなスタイルの書店、それに至った経緯、そして今後のビジョンをお話しいたします。

次に、発展めざましいデジタル・アート分野から、ライゾマティクスの代表、齋藤精一氏をお迎えします。自

在に浮かび舞う映像が日常を彩る昨今。何が起きているのか、その可能性は何か、未来に何をしようとしているのか、そんなことをうかがいたいと思います。

そして、建築分野からは、トラフ建築設計事務所の鈴野浩一氏。発想とセンスが評価され、従来の建築設計業務にとどまらぬご活躍。ご本人の「舞台芸術であろうが、プロダクトデザインであろうが、建築と同じように“敷地”を設定することで、スケールをひろげていくのだ」との台詞は、建築家にとって新たな世界を切り開くヒントかもしれません。

発表いただいた後は、『JIA MAGAZINE』の編集長である今村創平氏をモデレーターとして、テーマ「建築的思考の可能性」について話を掘り下げていきます。必聴です！

パネリスト



鈴野浩一
トラフ建築設計事務所



田島直行
代官山T-SITE 館長



齋藤精一
Rhizomatiks

モデレーター



今村創平
『JIA MAGAZINE』
編集長

アーキテクト・ガーデン 2017 建築祭

1部 委員会サミット

メインイベントのスタートは、支部全委員会の事業・活動発表です。支部内部は各地域会・委員会・部会、そして会員、関係者がそれぞれに活動をし、横断的なつながりがあまり図られていない状況があります。社会への発信力を高めたり、各々の内容を広く深く掘り下げるためにも、交流や連携を図ることは効果的かつ重要です。2016支部大会『支部会議』での支部5委員会と各地域会による地域会間の交流・連携に続いて、AG2017においては、19ある委員会の各活動の情報交換、会員、関係者への発表の場を設け、交流を促進し連携に繋げていきたいと考えます。

参加委員会

- 総務委員会
- 事業委員会
 - アーバントリップ実行委員会
 - アーキテクトガーデン実行委員会
 - JIA トーク実行委員会
- 教育文化事業委員会
 - 建築セミナー実行委員会
 - 学生デザイン実行委員会
 - 大学院修士設計展実行委員会
- 広報委員会
- 交流委員会
- 建築相談委員会
- 保存問題委員会
- 苦情対応委員会
- 建築家資格制度委員会
- クライアント支援委員会
- 都市・まちづくり委員会
- 建築・まちづくり委員会
- 災害対策委員会
- 国際事業委員会
- 環境委員会



2016 支部大会「支部会議」の様子



支部住宅部会 40 周年記念パーティーの様子



AG パーティー (例年の様子)

3部 AG パーティー

メインイベントの最後を締めくくるのは、建築家クラブでのパーティー。AG 委員会メンバーはもちろんパーティーにも手を抜きません。建築的思考のもと、皆様をあっという間に驚かせるネタを一つ、二つ準備してお待ちしております。恒例の生ハムも登場予定。最後まで楽しみましょう！

AGの歴史

JIA 関東甲信越支部が主催するアーキテクト・ガーデン (AG) は、建築家や JIA の多彩な活動や価値を広く社会に対して情報発信することを目的に、1990 年代にスタートしました。以降、毎年開催され、2012 年より開催時期を“建築家の日”6月15日を含む6月いっぱいとし、県域を含めた各地域会等の主催による積極的に社会やまちに開いた多くのイベント、そして東京でのメインイベントの二本を主軸とする現在のスタイルへと変化しました。



WEB サイト (<http://www.jia-kanto.org/AG2017>) に随時、情報を公開していきます。

問い合わせ先：支部事務局 AG 担当 大西摩弥 mohnishi@jia.or.jp

第10回 JCCA × JIA 協働シンポジウム

「多様性と融合」

日時：2017年2月23日(木) 18:00～20:30

場所：TOTOテクニカルセンター

主催：建設コンサルタンツ協会(JCCA)、日本建築家協会(JIA)

都市・まちづくり委員会

亀井尚志
(委員長)

大崎将大



東海林孝男

都市・まちづくり委員会では、より良いまちづくりのためにさまざまな活動を行っている。その活動の一つとして建設コンサルタンツ協会(JCCA)の美しい国づくり専門委員会と協働して、より良い都市空間や景観づくりのためのセミナー、シンポジウムを開催している。2016年9月には、JCCAとJIAの3回目の両会長対談が行われ、2020年の東京五輪を契機に、改めて土木と建築の融合の必要性について議論がなされた。この対談において、社会の価値観が多様になった今、地方創生やまちづくり、建築設計での領域を超えた融合を図ること、そしてそれらの融合には、若い世代の交流や、業界の魅力づくりが重要であるとの認識が共有された。これを受けて、「多様性と融合」をテーマに、2017年2月23日にJCCA×JIAの協働シンポジウムを開催した。

基調講演「景観からまちづくりへ」

本シンポジウムの基調講演として、土木出身ながら建築の世界で独立し、現在は、まちづくりのディレクションからコワーキングスペースの運営まで、実践的な活動を展開する建築家の西村浩氏(ワークヴィジョンズ代表取締役)を迎え、これからのまちづくりのあり方に向けた基調講演をいただいた。西村氏は「再び都市の時代へ(未だかつて経験したことのない縮退の時代に我々は何を考え、行動すべきか)」と題し、都市の衰退が進む佐賀市で行った中心市街地活性化の取り組みを例に、これからのまちづくりのあり方について紹介があった。

以下に西村氏の講演内容の骨子を記載する。

〈地方都市再生の最大の課題〉

地方都市の最大の課題は財政問題である。西村氏の分析によると、西村氏がまちづくりを手がける佐賀市をはじめ、その周辺20市町村の自立度指数(=自主財源/義務的経費)をみると15の自治体が即破産状態という状況にある。このような状況下にある地方都市再生のためには、お金の循環を生み地域の問題を一気に解決する地域ならではの産業育成・ビジネス開発が重要であり、民間のお金を上手に使う仕組みづくりが必要となってくる。

地元民間の経済活動を支援することにより税収を上げることが重要である。これまでのまちづくりは拡大する都市を支えるための公共空間整備が行われてきた。2005年に人口が



基調講演を行う西村氏

ピークを迎え、これから縮退する都市を支えるための公共空間のつくり方・使い方を考えていかなければならない。日本の現在の空き家総数820万戸、空き家率13.5%という状況下において、中心市街地では空き地は駐車場となり、地方都市郊外では太陽光パネルが並ぶ風景が広がっている。このような状況を再生していくためには、公と民の活動の連鎖と循環が重要である。

〈“ないものをつくる”から“ないものはない”の時代へ〉

建物は、竣工後から解体廃棄されるまでの期間に建設費のおよそ3～4倍の費用がかかるといわれている。地方都市においては、補助金の導入等により建設費を工面し、市民ホールの整備や再開発事業等による施設整備が進められているが、建設後の建物の運営管理費は当然全て地元負担であり、作られた施設はほとんど使われることなく短い期間で施設が閉鎖されるという状況となっている。建物というハードは結果でしかない。時代とともに変わる価値観とともに、これからはコンテンツと仕組みの時代へと突入している。まちづくりの方法も、まちづくりの主体も、時代とともに変わる必要があり、新たなまちづくりの仕組みを「発明」し、都市というフィールドで「実験」をしていく時代へと変貌していく必要がある。〈佐賀市中心市街地の再生と「わいわい!! コンテナ」〉

佐賀市の中心市街地もまた、衰退した中心市街地の一つである。西村氏は、この中心市街地でまちづくりの取り組みを行っている。中心市街地のアーケード街は、賑わいは衰退し、空き地が発生、駐車場化するという状況下であった。西村氏は、その空き地の一部に「わいわい!! コンテナ」と呼ばれる地域の人が集まれる場を創った。

JCCA × JIA 協働シンポジウム



わいわい!! コンテナに集まる子供達

提供：ワークヴィジョンズ

この取り組みを皮切りに、「マチノシゴトバCOTOCO SAGA 215」と呼ばれるカフェを併設するコワーキングスペースや、空き不動産のリノベーションにより、中心市街地の活性化に向けた取り組みを行っている。これらの取り組みはハード主体で行われた取り組みではなく、できる範囲の小さな投資で成功するモデルや方法を探していくということをたくさん積み重ねた取り組みである。(これからのまちづくり)

地域のブランド力が上がり、これを情報発信すると、面白い人々が集まるとともに、地域ならではの産業、ビジネスが起こって沿道の不動産の価値が上がっていく。そこで稼いだお金を公共空間に投資して、人とお金を循環させていくことがこれからの仕事のやり方である。先の東日本大震災や、2020年に控える東京オリンピックは、自分ごととして社会を見つめ直すきっかけである。未だかつて経験したことのない社会状況に向かって建築家・土木エンジニアは何ができるのかを考え、具体的なアクションを起こしていく必要がある。

パネルディスカッション

基調講演を受けて、JCCA、JIA両協会の若手技術者が登壇し、西村氏を囲んだパネルディスカッションが行われた。JCCAからは、佐々木慧氏、八尾修司氏、JIAからは大崎、東海林の計4名、コーディネーターはJCCA太田啓介氏が務めた。

入社2～10年目の若手技術者からの自己紹介の後、コーディネーターから最初に投げ掛けられた議題は、「この10年間で感じている社会や仕事環境の変化」であった。道路設計、土木コンサル、都市計画コンサル、建築設計と、それぞれ立場や役割の違う登壇者の意見を西村氏が拾い上げる形で議論が進められた。新しい道路の使い方や縮退時代における道路計画のあり方、水都大阪の先進的な取り組み、都市計画分野の大きな変革とフィールドワーク、市民に対しての専門家としての職能など、いずれのキーワードも、土木、建築という枠組みにとらわれない発想から浮かび上がるものであり、土木と建築

が共通で取り組むきっかけになり得るものとして可能性が感じられた。また、今後、我々のスタンスや仕事の取り組み方についてのディスカッションの主な意見としては、「プロセスデザインが重視されていく中で、10年、20年先に完成するものについて、全てを決め込むのではなく、時代の変化とともに軌道修正していけるような仕組みづくりが必要」「市民がデザインに係るよう意識改革をしていくとともに、市民に全てを任せるのではなく、専門家として大きな懐を持って先導していくことが重要」「施設の維持管理が課題となる時代で行政も困っている状況があり、今こそ沿道の使い方なども含め、提案していくチャンスである」「行政からの要請に振り回されるのではなく、民間だからこそリスクをとって行政にはできないいろいろなことをすべき」「失敗とはそこで辞めてしまうから失敗となるため、ずっとやり続けることが重要」などがあった。

会場とのディスカッションでは、若者からの意見が多く寄せられた。「市民が街を変えていくという意識をつくるためにはどうすればいいか」という質問には、市民を無理やり合意形成することは難しいため、まずは、やりたい人だけで集まって始めるべきとコメントがあった。「ワークショップの際、意見の軌道修正はどうすればいいか」という質問には、ずっと実験と言いつつながら、これはイケるというものに集約していくとのコメントがあった。また、「大規模な案件を扱うコンサルがネットワーク軽くまちづくりに踏み出すにはどういったことからはじめていいか」という質問には、組織に所属していても、個人で例えば5万円を出資して新しいことを始める、同じ意識を持った人たちを集めて行うこともできる。少額でも覚悟をもって取り組むべき。一見遠回りと思われるようなことでも、新しいビジネスに繋がる可能性があるとの提案があった。

多様な視点の議論があったが、これからの社会を大きく変えていくためには、目の前にある小さな実験からはじめることが重要であることを、改めて実感できたシンポジウムであった。



パネルディスカッションの様子

さしで かずまさ

指出一正氏に聞く

自分ごととして関われば どの地域もおもしろい



今回お話をうかがうのは、雑誌『ソトコト』の編集長指出一正さん。「スローライフ」「スローフード」「ロハス」といった環境に繋がる新しいライフスタイルを発信してきた『ソトコト』ですが、指出一氏が編集長になってからその視点をローカルに移行させました。いま地方で何が起きているのか、若者たちはなぜローカルに惹かれるのか。実際に地方に足を運び、今感じていることをお話しいただきました。(聞き手：Bulletin 編集委員)

——群馬県で出身ということですが、上京して編集者になるまでの経緯を教えてください。

中学生の頃から編集者になりたいと思っていました。当時は雑誌『POPEYE(ポパイ)*』の編集者になりたかった。僕は東京が圧倒的に力を持っている時代に東京の郊外のまちに生まれ育っていますから、東京に対してのコンプレックスがありました。地域の価値観が東京的でなければダメだという中で思春期を送ったため、東京的なものに自分が認められることがすべてでした。ですから、東京で雑誌の編集者になれば、社会に認められ、自分の希望の仕事・生き方になるという思いがありました。

それから、僕は大学くらいまではものすごく無口で、ボキャブラリーが貧困だと友達によく言われていました。中学生の時から自分でもそれはコンプレックスに感じていたので、人の言葉を聞く、人の言葉をまとめる仕事に就いたら否が応でも言葉が増えるのではないかと、だから編集者になりたいという気持ちが強かったのです。

でも、高校時代に『POPEYE』の編集者は無理だとわかりました。それは釣りしかしていなかったからです。高校では午後は授業に出ずに帰ってよい自主カットというものが許されていました。僕は月に1、2回、午後は学校を自主カットしてバスに乗り群馬県の榛名湖に釣りに行っていました。そのくらい釣りが好きだったので、たぶんおしゃれなことやファッションには自分は特別に向いていないとわかりはじめたのです。

大学入学で上京し、大学4年の時に山と溪谷社が出していた『Outdoor』という雑誌でアルバイトを始めました。編集部には、魑魅魍魎とした大人がたくさんいて、シュラフや簡易ベッドが置いてあり、疲れたらここで寝るという働き方には驚きました。その時はバブルの終わりくらいで、まだ東京的なものが人気でしたし、友人たちは大手企業に就職しました。でも自分の視点はそういうものではなく、野や山に向いていた。その野や山に視点を向けている大人がこうして生きていけていることがわかったので、こっちの世界に進もうと思いました。

ある時、編集部にてレボ局から電話があり、日本一の

オタクを決める「カルトQ」という番組で、ルアーフィッシングの回の予選に出る人を探していました。僕は大学3年の時に1年休学してスコットランドで釣りばかりしてきたこともあって出演することになり、予選を通過して優勝したのです。それで編集部の人々に「こいつはすごい。使える」と認められ、そのまま正社員になることが決まりました。

大学の4年間は僕にとって就職に有利なことはなにひとつなかったけれど、小学校2年からやってきた釣りと途中から始めた山登りで認められたことがとても嬉しかったし、こういうことに価値を持ってくれる大人たちのコミュニティにいられることを楽しく思いました。

——『ソトコト』に関わるようになったのはいつですか。

2004年の秋に前の会社を辞めて今の会社(木楽舎)に移りました。『ソトコト』は1999年に創刊していたので、ちょうど5周年くらいの時に副編集長として採用してもらいました。

——創刊当時はどのような雑誌だったのでしょうか。

『ソトコト』の最初のキャッチコピーは「世界初の環境ファッションマガジン」でした。1990年代は雑誌文化が華盛りで、雑誌がオピニオンリーダーだったりイメージリーダーで、雑誌の持つ求心力がとても高い時代でした。また、雑誌がものすごくセグメント化されていき、ファッション誌などは自分にぴったりの雑誌を手に入れやすかった。つまり、ファッションがみんなの生活に下りてきて完全に着地し、ファッションそのものが飽和したのが1990年代だと僕たち(『ソトコト』編集部)は考えていました。

では次のおしゃれはどこに向かうのか。これからは内面のおしゃれに変わるのではないか。その時、価値観の基軸は環境だろうと考えたのです。地球や人間の環境が健やかに保たれるためにどういうことをすればよいのか。日々の暮らしをどう考えたらよいのか。そういうことを知っていることがかっこいい時代になる。ですから、環

境をファッションとして捉える世界初の雑誌として『ソトコト』を創刊しました。そのあといくつかのキーワードが『ソトコト』を皆さんに届けてくれることとなります。代表的なところは、「スローフード」「スローライフ」「ロハス」ではないでしょうか。

——現在の『ソトコト』のテーマはなんですか。

僕は2011年の6月号から2代目の編集長になりました。東日本大震災後で、社会の気持ちとしては1番沈み込んだ時期でしたし、そんな時に、快適、快樂、しかも地球環境に優しいというのはちょっとちがうだろうと思っていました。これは2011年に気づいたのではなく、2008年のリーマンショックが起きたその年に、奇しくも僕は「地域若者チャレンジ大賞」というものの審査員になりました。これは、日本のいろいろな地域の中小企業と地方の大学生がタッグを組んで、それをメンターが見守りながら新しい事業を興していくというものです。それを毎年務めている中で、2008年、リーマンショックの影響も大きかったと思うのですが、東京でエリートコースを進んでいるような若い人が地域に関わり始めているのがよく見えたのです。ですから、「ロハス」という価値観から動かないと『ソトコト』のメディアとしての信頼が薄らいでしまうと感じ、僕が編集長になったタイミングで「ロハス」から「ソーシャル」という価値観に移行していきました。

——働き方にも変化はありましたか。

意識的に東京にいない生活にシフトしました。今は週に2日くらいしか東京にいません。残りは日本のローカルと言われる場所に行き、そこでたくさんの人と会って対話しています。

僕は編集者をやりながら編集者を辞めたと言っています。編集者が取材した時「また来ますね」と言っても実際は行かないですよね。だってもう終わったコンテンツですから。売るだけを考えたら、常に新しいものを取材対象にしなくてははいけない。でもそれは空々しいと思っていました。それよりも、こういういい町があって、そういう場所を探している人に届いてほしい、そこから何か生まれてほしいという価値観で記事を作りたい。だから僕はもう情報誌を作る編集者はやめて、関係を紡ぐ伝達者になろうと思いました。

とくにここ5年で仕事の内容も大きく変化しています。地域の若い人のプログラムに関わったり、メンターや、事業計画の介添人、サポート役のようなこともしています。建築家の皆さんと一緒に仕事をすることも多く、こ



「レンタル編集長の出張トークイベント」で、全国を訪れ、対話を行う

れは誰に協力してもらおうかなど、僕の中では事業も雑誌の台割作りと同じように取り組んでいます。

——編集スタッフは何人いらっしゃいますか。

6人で、20代30代の女性が多いです。若いスタッフがやりたいことを言ってくれるので、僕は誌面作りの大局は見ていますが、連載などに関しては発言して成長してくれている若い人たちが担当してくれています。

今はぐいぐい引っ張るリーダーばかりが必要とされる時代じゃないのもよくわかっていて、それは地域も同じです。地域のローカルヒーローたちは、スーパートップで圧倒的に強いアイコンではありません。これまでの人生があり、弱みもあったり、茶目っ気もあったり、一緒にいるとおもしろくて放っておけない人がリーダーになる時代だと思うのです。

ですから、僕だけが外に出て動いているのではなく、一緒に共有したり、まちづくりや福祉作業所の仕事に関わっているスタッフもいます。

——地域でどのように人と出会い、それを誌面にされているのでしょうか。

人に会いに行っている数が膨大なので、いくらでも人がいるのです。僕が地域でイベントをやっているわけではなく、地域の人たちがイベントをやりたいと言って僕を呼んでくれるので、自発性が違うのです。自分のまことを自分ごととして考えている人たちのコミュニティにいきなり出会う。『ソトコト』の来年以降の内容に繋がりそうな出会いが、僕がローカルにいればいるほど生まれるのです。今は不器用な若者でも、3年後くらいには何かをつくるだろうなという人がいる。そういう人との関係性をすごく大事にしています。

僕は、出会った人をすぐには誌面に出しません。情報は早い者勝ちだから早く出さなきゃと思う人もいるかもしれませんが、僕は違います。その人が出てほしいタイ

ミングが僕たちのメディアにはある。また、その人が出ていいというタイミングがある。僕はこの醸す時間がとても大切だと思っています。ですから、今頭の中には素敵なユニットがたくさんいるのです。

——なぜ若い人がローカルに向かうようになったのでしょうか。

昔の若い人は下北沢に住もうかな、中目黒かな高円寺かなと言っていましたが、今はその距離がもっと延びたと考えれば理解しやすいと思います。

なぜそうなったかという、これはNext Commons Labの林篤志さんがすごく明確に話をしています。昔はある特定の社会に属するのが当たり前で、自分の世界とは大きく違う土地に行くことは試練でした。ところが今僕たちは、LINE、Facebook、Googleなどたくさんの社会に暮らしています。3つも4つもの世界に属性を持っている今の若い人たちからすれば、今住んでいる場所から違う場所に行っても、他の社会もそれに付いてくるのでそんなに苦にはならない。ですから距離が何かを語る時代は終わったのでしょうか。みんなが移住だとか中山間地域に人がいないと大騒ぎしている一方で、その距離の価値観が完全に瓦解している若い世代は、むしろこんなに地価が高くてうさぎ小屋みたいな都会で頭を押しえつけられ、自分の暮らしが狭められるのだったら、もっと広い場所で農業や事業をやった方が楽しいと考えるようになっている。そういうことだろうと思います。

——実際にそういう人たちが増えているのですか。

見えていませんが大きく増えています。もちろん東京に人は変わらずに入ってきていて、人口50万人の困りごとのない都市が東京の近郊にはたくさんあります。しかし一方で、課題を抱えている人口2万人の都市は、人口は少ないけれど、ある移住者がカフェを開きたいと相談に来たら、その相談に乗ってくれる人が1日に50人

もSNSで繋がる状態が起きたりするのは。それに対して人口50万人の都市では、手伝ってくれる人が見えない。しかもその50万人のほとんどが自分の地域を自分の場所だと考えず、ただ家に帰って寝るだけの生活をしている。そうすると、人がいるのはもしかしたら人口2万人のまちの方なのではないかと最近は思います。

「自分のまちのことを自分ごととして考えられている人の人数＝本当の人口」だと考えなくてはいけないのではないのでしょうか。数ではなくて質でしょう。量ではなくて粒。本当におもしろいのですが、粒がないところはないのです。いないのは老害がすごいところ。まだ90代がリーダーだったりすると人は育ちません。

全体で見るとまだそのような若者は見えないかもしれませんが、確実に増えています。ただ、その増えているものを「増えているね」と言えるのか、「いやいや人が増えているのは東京でしょ」と言えるのか、大人がその2極をまず見極めないといけないと思います。

——それはSNSを使いこなす若い世代だからこそ起こっている現象なのではないでしょうか。

やはり20代30代とローカルはかけ算するとよいわけですね。まだあと50年60年は現役で元気でいられる人たちが、お子さんが生まれたりして家族になっていくのは考えれば考えるほど未来思考ですね。行政もそこをちゃんとわかりはじめているので、若い人たちにターゲットを絞って移住特集などを行っています。

SNSはもうデフォルトになっていて、もはやSNSが若い人たちをローカルに向かわせたわけではないというのが僕の考えです。Googleで「お盆って何だろう」と検索するくらいお盆がもう過去の行事になっているし、両親の田舎も疎遠になってもう行かない。ですから、ふるさとながない若い人たちがローカルに何を見出しているかということ、ファンタジーだと思うのです。彼らにとっては映画のセットのような風景に見える。石州瓦のまち並みを見れば、なぜこんなところにこんな町があるのだというふうに見える。彼らの頭の中の日本地図は国土地理院が作った日本地図ではないのです。

また、地域に興味がある人は、読めない地名の場所に惹かれています。奥出雲、三次、世羅高原など。そういう場所になぜ興味を持つかという、情報の発信力が決して大きくないのが幸いして、自分が発見した気持ちになれるからです。これはとても大事で、若い人たちは自分が見つけたということにすごく喜びを感じます。ですから、「そんな昔から知っている」という場の雰囲気を壊すようなことは言うてはダメなのです。若い人たちが



奈良県・下北山村との協働事業「奈良・下北山 むらコアカデミー」の修了式

自分で見つけた宝物がたくさんあればあるほど、その地域は仲間を増やしていくと思います。そういうことも含めて、なぜ若い人たちがローカルに興味を持っているのかを、大人たちが精査して判断しなくてはなりません。

——東京にもローカルな部分があります。

今は便宜的に「地方」という言葉を使っていますが、自分の頭の中では地方は卒業していて、それに置き換わる言葉は「地域」です。地域は東京にもあります。ですから日本全体が地域化しているのではないかというのが僕の価値観です。小さいコミュニティがそれぞれのプロジェクトをおもしろがっている。東京vs地方ではなく、地域×地域、地域+地域のような図式になっているのが今だと思います。

——これからのまちづくりや生活には何が重要になってくるとお考えですか。

僕はこれからは関係の時代だと思っています。「関係人口」がますます増えるでしょう。関係人口というのは正式な言葉ではありません。正式な言葉としては交流人口と定住人口があります。交流人口というのは一過性でそこに行く人口で、定住人口は住んでいる人。この二元論で語られがちですが、今は新しいかたちの人口をカテゴリーすべきタイミングだと思うのです。

島根県で、東京の若い人たちと島根を繋ぐ人材育成の事業をしています。5年間積み重ねてきて改めて感じるのは、すぐに移住はできなくても島根のことが大好きで島根に友達がいて、島根のまちづくりに関わっている人が東京にいます。これは交流人口というには濃度が濃いし、定住人口というには濃度が浅い。その真ん中の人口を「関係人口」と呼んだらいいのではないかと、今のローカルやソーシャルの分野での新しい言葉になっています。

関係人口がたくさんいる場所といない場所が明確に分かれます。いる場所は人が人を紹介してくれるまちで、こういう場所を関わり代しろがある場所と呼んでいます。まちの首長が集まると我がまち自慢になりがちですが、それでは人は集まりません。だってどのまちも同じですから。それよりも自分たちの弱みを見せることのできる行政区に若者は集まります。おじいちゃんおばあちゃんしかいなくて困っている、こういう広報がしたいけれどそれを発信する技術がないなど。弱みを見せられると若い人は関わりどころを見つけやすい。関わり代のある地域が若い人を集めています。

それから、地域に観光案内所はたくさんあるけれど、

ほとんど機能していません。ですから、観光を案内するのではなくて、関係を案内する場所が地域に増えると良いと思います。ゲストハウスは関係案内所になりやすいし、商業施設やカフェでもいい。人やまちでもいいのです。地域のことをミクロな視点で楽しむ人たちが増え、関係性を案内してくれる場所が増えれば、どの地域も本当はおもしろいはずですよ。

——人々の求めているものが変わってきたのですね。

実は人は今お金を使いたくて動いている時代から卒業していて、何が欲しいのかというに関わりどころだと思うのです。友達ができたとか、このまちに知り合いができたとか、自分とぴったり合う仲間ができたとか。そういった関わり合いを探すためにお金を使ったりしている。クラウドファンディングがまさにそうです。ですから関係人口はますます増えるでしょう。

自分の知っている場所、いちばんはふるさとだと思いますが、ふるさとのような価値観で安心できる場所はひとつでなくてもよいというようになってきている。東京に住んでいるけど、時々関わっているまちや応援しているまちがある。そういう自分の頭の中の日本地図で自分が関わっている社会が3つも4つもあるのが当たり前の時代になっているのではないのでしょうか。これからますますそういう時代になる気がします。

——貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2017年2月24日 木楽舎にて
聞き手：八田雅章・長澤 徹

PROFILE

指出一正（さしで かずまさ）

月刊『ソトコト』編集長



1969年群馬県生まれ。

上智大学法学部国際関係法学科卒業。

雑誌『Outdoor』編集部、『Rod and Reel』編集長を経て、現職。

島根県「しまコトアカデミー」メイン講師、広島県「ひろしま里山ウェブ拡大プロジェクト」全体統括メンター、広島県「ひろしま里山ソーシャル・カフェ」トータルファシリテーター、高知県文化広報誌『とさぶし』編集委員、沖縄県久米島町アドバイザー、静岡県『「地域のお店」デザイン表彰』審査委員長、奈良県「奥大和アカデミー」メイン講師、奈良県下北山村「奈良・下北山 むらコトアカデミー」メイン講師、広島県「ひろしま さとやま未来博2017」総合監修をはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。趣味はフライフィッシング。

石井和紘 異聞



岩本弘光

稀代の建築家である石井和紘(以下、敬意をこめて石井と略称)が一昨年(2015年)に70歳で逝去した。世界で活躍する同世代の「野武士」たちを横目に早すぎる死であった。翌年に「偲ぶ会」が国際文化会館で催され、著名な建築家や旧所員が集まって黄泉の国に54の言葉をとどけた。思い返せば、私は一体石井に何を学んだというのであろうか。

石井事務所には1981年から3年間在籍した。当時37歳だった石井の評判は日出の勢いで、所員にハンドルを握らせた白いベンツ300Dでクライアントの間を駆け回っていた。事務所では「直島町役場」や「田辺エージェンシービル」などのプロジェクトで熱気が溢れ、建築家として最もヴィヴィッドな活動期であったろう。ある時石井が「これからは東の石井、西の安藤の時代だ」と言い放つのに驚いたが、あながちお伽噺とも思えなかった。

石井の思考には類のないところがあって、それがそのまま建築となって表れた。破天荒なデザインに眉をひそめつつも、偽悪的でどこか突き抜けた非凡さに巷間の評価は毀誉褒貶相半ばしたが、実際、いまでも同類の建築家を見出すことは困難だろう。それ故入所後ほどなくして、石井の持ち味を習うことは誰もできまいと合点した。

アトリエの階下から「出来たぞー!」の咆哮が響く。伊東屋の原稿用紙に極太のモンブランで描いたスケッチの出来上がりで、石井はこれで建築はほぼ完成、と考えていたかも知れない。材料やディテールに関心が希薄で、最後まで設計や現場を追い込む様子はなかった。だから現場が荒れた。「54の窓」は故西澤文隆氏に「ディテールが汚い」と酷評され、石井は確かカタカナで「バントウケンチクカ」と応じていた。「54の屋根」は雨漏りが止まず、先輩所員は「54の雨漏り」と耳打ちした。

一方、設計時には興味深いセッションがあった。構造である。いわゆる「ポスト・モダン」の潮目を捉えた表層的なデザインが目玉だったが、構造には執着した。朝から始まった構造の打合せは、店屋物の井片手に延々と夜半まで続いた。何故か詩的な美しさに着地できない石井の建築であったが、石井自身は「構造」の

ロジックを大事にしながら「部分」と「表層」で格闘していたと言えよう。

そんなある冬の朝、温めていたイタリア留学を叶えるべく辞職を願い出たところ「君は長期休暇をくれ、と言うべきだ」と返された。流石に筆の立つ建築家の言葉に舌を巻いたがしまいには分別ない言葉で面罵され、何かが砕けて心に決意が住み着いた。その数日後に事務所を退職した。

ポッティチェッリのミュージアムが微笑んでくれたのか、幸いイタリア政府給費留学試験に合格した。1986年秋、抽象形態を良くするR.ブーティ教授がいるフィレンツェ大学にむけてイタリアに乗り込んだ。2巡目の春にトスカーナを抜けアッシジのサン・フランチェスコ聖堂めぐりに乗ってポンコツ車を走らせ、小高い丘の上にある聖堂の足元をやり過ごした時、ある種の啓示ともいえる美的な衝動に襲われた。何事かと引き返すと、聖堂下の急峻な崖を支えるバットレスの連なりがそびえていた。重力がバットレスに置き換わって「美」を放射していたのだ。いわば「重力の可視化」に他ならず、イタリアの教えを得心した喜びは今も鮮明だ。

この「啓示」はどこに由来するのか。サン・フランチェスコの福音か。あるいは構造に着想する建築術を伝えた石井の背中であったかも知れない。そうしてみると、雲水のごとく辛くも楽しかった事務所時代の習いを、知らず新たにしていたとも言えよう。



サン・フランチェスコ聖堂の遠景

抱負を語る

「建築家」と呼ばれるために



鎌田賢太郎

本会に入会するにあたって、8年間勤めた設計事務所の師より問われた言葉を思い出す。

『建築家とはなにか？ 建築士・設計士と建築家は何が違うのか？』よくある問いではあるが、大学卒業直後の建築かぶれの勘違い学生であった私にとって、改めて足元を見直す問いであったと思い返す。

「建築家とは称号であり、自称するものではない」

当時、師が示した答えは、『建築家とは、他者にのみ認められ、容易に名乗れない崇高な存在だ』と。それ以来、常にこの問いに対する自分なりの答えを意識しながら探りつつ、日々の業務に追われてきた。

そして独立開業して6年が過ぎ、デザインの能力や建築の知識を高め、施主の要望に応える苦労を重ねつつ、まちづくりやボランティア活動に関わる機会を経て、「こうして身に付けてきた建築の能力や知識を、社会へ還元し貢献できてこそ、建築家の称号にふさわしいのではないか？」と考えるようになった。建築家の定義は、各々で統一されることはなく、それで良いと思う。むしろ自らの目指すべき理想像が、建築家の定義になると感じている。

設計能力を高めることは当然として、自らの職能をどのように社会へ活かすことができるだろうか？ 建築の可能性を信じつつ、日々の設計業務の先に、そんなポンやりとした理想像を掲げながら、精進したいと思う。



一本柳の終の住処

抱負を語る

国内から海外へ



福田朋宏

私の所属している事務所は、集住施設の設計監理を主な業務としており、私も日本国内の集合住宅や寮などの集住施設の設計業務に1998年から2015年までの17年間携わってきました。しかし、これからの国内の住宅市況を考えると、人口減少に伴い住宅の着工数の減少、設計業務の機会も徐々に減退していくことは明らかです。そこで、私は2012年より国内から海外のプロジェクトへシフトしていき、2015年3月国内の分譲集合住宅の竣工を最後に、担当するプロジェクトは海外のみとなりました。

これまで国内の分譲集合住宅の設計に関しては、それなりの自負を持って従事してきましたが、海外では文化・慣習・法律や地域特有の事情が日本と全く異なることに驚かされ、国内での設計の経験は通用しないことを多く感じています。そんな状況下ではありますが、海外のクライアントもしくは海外へ進出する日系クライアントは、日本の設計事務所だからこそできるデザインや品質に期待し、依頼をしてくれます。現在私は、この期待に応えるべく、これまで培ってきた国内の経験と実績を海外で使えるよう適応させることに注力しています。

今回、JIAに入会したことを契機に、先輩方の知見や取



Project in Indonesia

り組みを吸収し活用させていただき、時には私の海外プロジェクトでの経験を報告し、JIAにも貢献できればという思いしております。今後ともよろしく願いいたします。



Project in Saudi Arabia

保存問題委員会

保存問題委員会の
要望書提出について



保存問題委員会
委員長
安達文宏

1989年の当委員会発足後の趣旨文には、「建築はその誕生から生命が与えられ、可能な限り生き続けることが本来の姿です。創る行為には使い続けられる前提があり、創造と保存とは同義であると考えています。」と明記されています。社会へ発信する手段としての要望書提出は、当時から最重要な活動の一つでした。

要望書は提出先へうかがって直に手渡しし、必ずその場で読み上げます。その後30～40分程度の意見交換を行い、要望の趣旨をお伝えし、提出先の事情やお気持ちをうかがい、その接点を探ります。要望書の最後には「公益社団法人日本建築家協会としましても、出来る限りの協力をさせて頂く所存であることを申し添えます。」と記載し、必ずその旨お伝えします。今まで協力させていただいた案件はいくつもありますが、検見川送信所(吉田鉄郎・

千葉市)、博報堂旧本館(岡田信一郎・千代田区)、九段小学校(東京市復興局・千代田区)、旧町立図書館(鎌倉市)、数寄屋橋交番(山下和正・中央区)などが挙げられます。

数寄屋橋交番は、規模的な制約で建て替えになりましたが、警視庁から当委員会へデザイン継承への協力依頼があり、当初の設計者の山下和正氏をご紹介します。デザイン監修依頼をしていただきました。今後のデザイン交番建て替え問題に対し、先鞭をつけるものと考えています。

要望書提出は、目的ではなくあくまでも手段ですが、関係提出先と直に率直な意見交換をするきっかけを作り、その後の話し合いの継続を促し、それにより計画の変更や転換が起きる可能性もあります。保存活動を円滑に進めるには、まず顔を合わせてじっくりと話し合う機会を持つことが最重要だと実感しています。

●保存問題委員会 要望書リスト

提出年	要望書案件	竣工年	設計者	所在地	備考
1994.09	栃木県庁舎	1938年(昭和13)	佐藤功一	栃木県宇都宮市	一部曳家保存
1995.07	鎌倉市立御成小学校	1933年(昭和8)		神奈川県鎌倉市	一部保存
1996.07	小田原城内小学校	1929年(昭和4)		神奈川県小田原市	解体
1997.03	東京都復興記念館	1931年(昭和6)	伊藤忠太、萩原孝一	東京都墨田区	保存
1997.04	丸ビル	1923年(大正12)	桜井小太郎	東京都千代田区	解体
1997.09	晴海高層アパート	1957年(昭和32)	前川國男	東京都中央区	解体
1997.10.	誠之堂、清風亭	誠1916年(大正5) 清1926年(大正15)	誠(田辺惇吉) 清(西村好時)	東京都世田谷区/ 埼玉県深谷市へ	保存/ 移築(1999年)
1997.11	旧吉田五十八邸	1944年(昭和19)	吉田五十八	神奈川県二宮町	保存
1998.01 再	誠之堂、清風亭	誠1916年(大正5) 清1926年(大正15)	誠(田辺惇吉) 清(西村好時)	東京都世田谷区/ 埼玉県深谷市へ	保存/ 移築(1999年)
1998.03	下田村大浦小学校ならびに大銀杏	1916年(大正5)		新潟県下田村	解体
1998.06	光友倶楽部(旧伊藤博文別邸)	1907年(明治40)		東京都品川区から 山口県萩市へ	一部移築(2001年)
1998.06 再	旧吉田五十八邸	1944年(昭和19)	吉田五十八	神奈川県二宮町	保存
1998.06	日本工業倶楽部会館	1920年(大正9)	横河民輔・松井貴太郎・外	東京都千代田区	一部保存
1998.09 再2	旧吉田五十八邸	1944年(昭和19)	吉田五十八	神奈川県二宮町	保存
1998.09	野方給水塔	1929年(昭和4)	中島鋭治?中島洋吉?	東京都中野区	保存 (災害用に転用)
1998.10. 再2	誠之堂、清風亭	誠1916年(大正5) 清1926年(大正15)	誠(田辺惇吉) 清(西村好時)	東京都世田谷区/ 埼玉県深谷市へ	保存/ 移築(1999年)
1998.10. 再	日本工業倶楽部会館	1920年(大正9)	横河民輔・松井貴太郎・外	東京都千代田区	一部保存
1998.11	同潤会清砂アパート	1927年(昭和2)	同潤会	東京都江東区	解体
1999.09	旧日本勧業銀行別棟、クラブハウス	別1900年頃(明治30年代) ク1937年(昭和12)	別棟(妻木頼黄)	東京都目黒区/別棟 千代田区より移築	解体
1999.09	同潤会江戸川アパートメント	1934年(昭和9)	同潤会	東京都新宿区	解体
1999.09	東京中央郵便局	1931年(昭和6)	吉田鉄郎	東京都千代田区	一部保存
1999.11	群馬音楽センター、井上房一郎邸	音1961年(昭和36) 井1952年(昭和27)	音(レーモンド)、 井(レーモンドの写し)	群馬県高崎市	保存
1999.12	三島町立脇野町小学校			新潟県長岡市	解体
2000.05	交詢社ビル	1929年(昭和4)	横河時介(横河工務所)	東京都中央区	解体
2000.06	同潤会青山アパートメント	一期1926年(大正15) 二期1927年(昭和2)	同潤会	東京都渋谷区	解体
2000.06	芝浦・協働会館	1936年(昭和11)	酒井久五郎	東京都港区	保存
2000.07	旧小笠原邸	1927年(昭和2)	曾禰中條建築事務所	東京都新宿区	保存
2001.03	旧東京大学生産技術研究所	1928年(昭和3)	第一師団経理部	東京都港区	一部保存
2001.06	旧J.H.モーガン邸および庭園	1931年(昭和6)頃	J.H.モーガン	神奈川県藤沢市	一部現存
2001.07	サッポロライオン銀座七丁目店	1934年(昭和9)	菅原栄蔵	東京都中央区	現存
2001.09	旧千代田生命本社ビル	1966年(昭和41)	村野藤吾	東京都目黒区	保存

提出年	要望書案件	竣工年	設計者	所在地	備考
2001.11	旧川越織物市場	1910年(明治43)		埼玉県川越市	保存
2001.12	再 栃木県庁舎	1938年(昭和13)	佐藤功一	栃木県宇都宮市	一部曳家保存
2002.02	再 井上房一郎邸	1952年(昭和27)	レーモンドの写し	群馬県高崎市	保存
2002.02	旧同潤会大塚女子アパートメント	1930年(昭和5)	同潤会	東京都文京区	解体
2002.07	JR国立駅舎	1926年(大正15)	河野某(伝)	東京都国立市	解体
2003.01	慶應義塾大学萬来舎(第二研究室)	1951年(昭和21)	谷口吉郎	東京都港区	解体
2003.01	旧正田邸	1936年(昭和11)		東京都品川区	解体
2003.02	再 東京中央郵便局	1931年(昭和6)	吉田鉄郎	東京都千代田区	一部保存
2003.08	国際文化会館の建築ならびに庭園	1955年(昭和30)	前川國男・坂倉準三・吉村順三	東京都港区	保存
2014.04	旧荻窪歯科医院	1923年(大正12)	桜井小太郎	東京都杉並区	解体
2005.01	三信ビルディング	1929年(昭和4)	松井貴太郎(横河工務所)	東京都千代田区	解体
2005.06	新発田カトリック教会の環境保存	1966年(昭和41)	アントニン・レーモンド	新潟県新発田市	保存
2005.06	旧国立衛生院白金庁舎	1938年(昭和13)	内田祥三	東京都港区	保存
2005.09	本牧スタンダード石油社宅及敷地	1949~50年(昭和24~25)	アントニン・レーモンド	神奈川県横浜市	解体
2005.09	歌舞伎座	1924年(大正13)築 1950年(昭和25)改修	岡田信一郎(新築) 吉田五十八(改修)	東京都中央区	解体
2005.10	丸の内八重洲ビル	1928年(昭和3)	藤村 朗	東京都千代田区	解体
2005.10	旧山口勝蔵別荘	1912年(大正元)	小笹三郎(伝)	神奈川県大磯町	保存
2005.11	栃木県庁舎議事堂	1969年(昭和44)	大高正人	栃木県宇都宮市	解体
2005.12	再2 東京中央郵便局/大阪中央郵便局	東京 1931年(昭和6) 大阪 1939年(昭和14)	吉田鉄郎	東京都千代田区、 大阪府大阪市	東一部保存、 大解体
2005.12	中銀カプセルタワー	1972年(昭和47)	黒川紀章	東京都中央区	現存
2005.12	旧帝蚕倉庫事務所と歴史的建造物群	1926年(大正15)	遠藤於菟	神奈川県横浜市	一部現存
2006.04	文化学院校舎	1937年(昭和12)	西村伊作	東京都千代田区	一部保存
2006.07	横浜ストロングビル	1937年(昭和12)	矢部又吉	神奈川県横浜市	解体
2006.09	旧飯箸邸	1941年(昭和16)	坂倉準三	東京都世田谷区/長 野県軽井沢町へ移築	移築保存
2006.11	大学セミナーハウス	1965年(昭和40)	吉阪隆正+U研究室	東京都八王子市	保存・一部解体
2006.11	元町公園および旧元町小学校	建物 1927年(昭和2) 公園 1930年(昭和5)	東京市復興局	東京都文京区	現存
2007.01	東京女子大学旧東寮及旧体育館	1924年(大正13)	アントニン・レーモンド	東京都杉並区	解体
2007.06	旧日本相互銀行本店	1952年(昭和27)	前川國男	東京都中央区	解体
2007.10	講談社野間道場	1925年(大正14)		東京都文京区	解体
2008.01	学習院大学ピラミッド校舎	1960年(昭和35)	前川國男	東京都豊島区	解体
2008.04	山下居留地遺跡	幕末~明治期		神奈川県横浜市	一部保存
2008.06	再3 東京中央郵便局	1931年(昭和6)	吉田鉄郎	東京都千代田区	一部保存
2008.07	検見川送信所	1926年(大正15)	吉田鉄郎	千葉県千葉市	保存
2008.10	横浜松坂屋本館	1921年(大正10)	出浦高介	神奈川県横浜市	解体
2008.10	再4 東京中央郵便局	1931年(昭和6)	吉田鉄郎	東京都千代田区	一部保存
2009.01	両国公会堂	1926年(大正15)	森山松之介	東京都墨田区	解体
2009.02	山梨県庁舎第一南別館(旧山梨県立図書館)	1930年(昭和5)		山梨県甲府市	解体
2009.06	世田谷区民会館庁舎群及外部空間	会館 1959年(昭和34) 庁舎 1960年(昭和35)	前川國男	東京都世田谷区	現存
2009.09	博報堂旧本館	1930年(昭和5)	岡田信一郎	東京都千代田区	解体復元
2010.02	片倉工業日本社ビル	1922年(大正11)	清水組	東京都中央区	解体
2010.02	歌舞伎座	1924年(大正13)築 1950年(昭和25)改修	岡田信一郎(新築) 吉田五十八(改修)	東京都中央区	解体
2010.03	虚白庵	1970年(昭和45)	白井昇一	東京都中野区	解体
2010.04	明石小学校をはじめとする「復興小学校」校舎	大正末~昭和初期	東京市復興局	東京都中央区	明石等解体
2010.06	旧三吉小学校「横浜市立復興小学校」	1926年(大正15)	横浜市建築課	神奈川県横浜市	解体
2010.08	赤坂プリンスホテル	1983年(昭和58)	丹下健三	東京都千代田区	解体
2010.11	長野市民会館	1961年(昭和36)	佐藤武夫	長野県長野市	解体
2010.12	神奈川県立近代美術館鎌倉館	1951年(昭和26)	坂倉準三	神奈川県鎌倉市	保存
2011.01	旧麻屋百貨店(旧麻屋呉服店)	1934年(昭和9)	高堂徳治	群馬県前橋市	解体
2011.02	旧御茶の水スクエアA館	1987年(昭和62)	磯崎 新	東京都千代田区	現存
2011.03	早稲田大学文学部校舎	1962年(昭和37)	村野藤吾	東京都新宿区	解体
2011.06	震災被災文化財(真岡市物産会館)			栃木県真岡市	解体
2011.06	本郷館	1905年(明治38)		東京都文京区	解体
2011.09	横浜市における歴史的建造物			神奈川県横浜市	一
2012.01	旧山崎歯科医院	1888年(明治21)		長野県松本市	解体
2012.03	新村駅舎	1921年(大正10)		長野県松本市	保存
2012.04	武蔵豊岡教会	1923年(大正12)	W.M.ヴォーリズ	埼玉県入間市	現存
2012.10	千代田区立九段小学校・幼稚園校舎	1926年(大正15)	東京市復興局	東京都千代田区	保存・一部復元
2012.12	和田堀給水所1号・2号配水池・付属施設群			東京都世田谷区	解体・一部現存
2013.02	片倉工業松本社有地と建物群			長野県松本市	一部保存
2013.04	再 千代田区立九段小学校・幼稚園校舎プロボ	1926年(大正15)	東京市復興局	東京都千代田区	保存・一部復元
2013.10	再 神奈川県立近代美術館鎌倉館の活用と景観保全	1951年(昭和26)	坂倉準三	神奈川県鎌倉市	保存
2013.10	再 旧帝蚕倉庫及び事務所	1926年(大正15)	遠藤於菟	神奈川県横浜市	一部現存
2013.12	岩舟町立小野寺北小学校旧校舎	1894年(明治27)		栃木県岩船町	現存
2014.03	通信ビル	1964年(昭和39)	小坂秀雄	東京都千代田区	解体
2014.05	三原橋センター	1953年(昭和28)	土浦竜城	東京都中央区	解体(橋梁現存)
2014.07	武井武雄生家	1700年代		長野県岡谷市	現存
2014.08	KN日本大通りビル(旧三井物産横浜ビル・倉庫)	1910年(明治43)	遠藤於菟	神奈川県横浜市	解体(倉庫)
2014.08	中野サブプラザ	1973年(昭和48)	林 昌二	東京都中野区	解体決定
2014.09	日本橋野村ビルディング	1930年(昭和5)	安井武雄	東京都中央区	現存
2014.09	新潟市旧會津八一記念館	1975年(昭和50)	長谷川龍雄	新潟県新潟市	保存
2014.09	九段会館	1934年(昭和9)	小野武雄、川元良一	東京都千代田区	現存
2014.12	旧豊多摩監獄正門	1915年(大正4)	後藤慶二	東京都中野区	現存
2015.03	旧町立図書館	1936年(昭和11)		神奈川県鎌倉市	保存
2015.04	東京會館ビル・富士ビル・東京商工会議所ビル	1960~70年代(昭和30~40年代)	谷口吉郎、三菱地所	東京都千代田区	解体
2015.09	旧NHK富士見ヶ丘クラブハウス	1954年(昭和29)	前川國男	東京都杉並区	解体
2015.09	数寄屋橋交番	1982年(昭和57)	山下和正	東京都中央区	解体決定
2015.12	鷺宮住宅	1957年(昭和32)	前川國男	東京都中野区	現存
2015.12	再 旧豊多摩監獄正門	1915年(大正4)	後藤慶二	東京都中野区	現存
2016.02	再 岩舟町立小野寺北小学校旧校舎	1894年(明治27)		栃木県栃木市	現存
2016.06	再2 神奈川県立近代美術館鎌倉館+コケシ	1951年(昭和26)	坂倉準三+イサム・ノグチ	神奈川県鎌倉市	現存/コケシ(移設)
2016.12	再 世田谷区民会館・現庁舎・外部空間の継承プロ セス	会館 1959年(昭和34年) 庁舎 1960年(昭和35年)	前川國男	東京都世田谷区	現存
2017.02	衆議院憲政記念館	1960年(昭和35年)	海老原一郎	東京都千代田区	現存

要望書提出回数 : 113回(戦前建物81回/戦後建物32回)
 要望書提出案件 : 95件(再提出を除く)(戦前建物案件66件/戦後建物案件28件/他1件)
 解体 : 戦前建物31件、戦後建物16件(戦前47%/戦後57%)
 保存・現存・復元等 : 戦前建物35件、戦後建物12件(戦前53%/戦後43%)

アーバントリップ実行委員会

第82回 JIA アーバントリップ

—アーティストと職人～技術と発想—

住宅部会
三沢 護

昨年11月30日に第82回目になる「アーバントリップ」に参加しました。年に数回あり、残念ながら見逃すこともあります。今回は住宅部会の中村さんからメールをいただき見逃さずにすみしました。いつも多くの人が参加しており毎回お会いする方もいる和やかな見学会です。

最初は隈研吾氏設計の「サニーヒルズ」です。例の「地獄組み」で、表参道を少し入った通りを歩いていくと、ホウ酸で防火処理を施した東濃檜60角の建築が突然街に現れます。外観をひとしきり見学した後に内部も見せていただきました。木を表層の意匠だけでなく構造体として実現させていることに驚かされます。屋上の手摺として組んでいるところを触ってみてもしっかりして安心感があります。担当者から防火や避難などの法的処理、行政との打ち合わせに時間がかかった貴重な話をうかがえました。ただメンテナンスがかかりそうですが、当日も植木職人が手入れをしているのを見て大事に使われていることが分かる建物でした。

次に向かったのは坂倉準三氏設計の「岡本太郎記念館」です。川崎にある美術館は知っていましたが、南青山の一角に記念館があるとは知りませんでした。ブロック造に木造小屋組の明快な建築で、内外に多くの作品が展示してあり建物を引き立てています。ここをアトリエとして、「太陽の塔」などが生まれていったと思うと感慨深いものがあります。設計を依頼したのはパリ時代の朋友・坂倉準三氏。以前JIAで阿部勤、室伏次郎両氏に坂倉事務所の初期を聞く機会があり懐かしく思いました。60年

以上経た近代建築が都会の中に残っていることに驚きです。今度1階の喫茶店でコーヒーでも飲みながらゆっくり鑑賞したいものです。そんな環境にあり、ゆったりした時間が流れる建物です。

最後に久米設計の「東京都庭園美術館」です。白金台の広大な緑地内に西洋庭園、日本庭園、芝生広場がある一番奥にあり、かつての朝香宮邸である本館に増築して新館が設けられています。新館は素材の単純化や本館と競合しないデザインなど、本館に寄り添うように控えめに作られているのが印象的でした。本館は都指定有形文化財であるため現行法適用除外を受けての改修になります。設計担当者から細かい話を聞きましたが、そんなところまでと思われるところが多々あったようです。行政の建築関係部署、文化庁、その他多くの関係部署との調整に気の遠くなる時間と根気が必要だったことは想像に難くありません。それを乗り越えて建築にしていけるのはさぞかし苦勞の連続だったと思います。夕暮れ時になって照明が灯されると本館のオレンジ色の明かりと新館の白い明かりに庭園灯が加わり幻想的で都心にいるのを忘れさせてくれたところで、今回のアーバントリップは終了になりました。

東京の街中を建物を見ながら歩くのも、そうあることではないので楽しめましたし、途中東大の学食で昼食を取ったのも印象に残りました。毎回思うのですが、なかなか見られない建築を設計者自らの解説付きで見学できる機会はそうないと思います。委員の方々の努力に感謝します。



隈研吾氏設計「サニーヒルズ」



久米設計「東京都庭園美術館」夜景

交流委員会

2016年度委員会活動報告



交流委員会
法人協力Gグループ
情報開発部会 部会長
天神良久

交流委員会Gグループは、情報開発部会と合同で、CAD・CGなどの利用技術の情報発信から始まり、昨今では話題のBIMや、スマホ、モバイル端末、GIS、環境問題、健康談義(?)等々調査範囲を拡大し、会員間での情報共有を推進しています。年間の活動は、月1回の合同勉強会と、年に2回合同見学会を開催しています。勉強会の講師は、専門家をお呼びして話してもらう会と、会員自らが調べた情報を披露してもらう会があります。

2016年度の活動を振り返ってみると、勉強会では、「スマホのアプリで業務の効率アップ!」、「東北復興状況視察 第2回」、「PPP (public-private partnership: 官民連携) の手法と実例の紹介」、「日本の森林からバイオマス発電の資源へのエネルギー革命」、「(株)エスエスのご紹介と竣工写真の現状」、「建物保全とデータベース」を開催。

見学会では、「ワインと軽食を楽しみながら、健康談義をする会」、「国立近現代建築資料館「建築と社会を結ぶ大高正人の方法」」を開催しました。

特に思い出に残った出来事をレポートします。

◆10月5日に古池廣行氏(情報開発部会委員)の船橋の自邸で開催された「ワインと軽食を楽しみながら、健康談義をする会」では、古池氏自ら全て食材を厳選購入され、調理もしていただきました。食前酒で乾杯し、スムージーを初めて飲み、ビーフサラダを古池氏自家製ドレッシングで楽しみ、メインディッシュは「NZラム肉のステーキ」とグルメに舌つづみし、健康談義も尽きることなく、また、5名で飲み干したボルドーワインが6本とこれもまた「良くぞ飲んだり」の盛会となりました。



◆12月16日に開催した「国立近現代建築資料館「建築と社会を結ぶ大高正人の方法」」の見学会では、桐原武志氏(JIA再生部会委員、国立近現代建築資料館学芸員)に案内をしていただき、前川國男建築設計事務所入所時



国立近現代建築資料館2F エントランスにて、見学会参加者の集合写真

の図面や、大高建築設計事務所での数々の作品を紹介いただきました。

◆5月に開催した深滝准一氏(情報開発部会委員)による「スマホのアプリで業務の効率アップ!」の勉強会では、“なるほどこんな無料アプリがあったのか!”とビックリ! 特にお勧めは、1.スケジュール管理「ジョルテ」、2.単位の変換「Converter+」、3.仕事のデータをどこでも閲覧「DropBox」、4.名刺管理ソフト「Eight」、等々、皆様もぜひお試しを!

◆2月には、Gグループ待望の新会員、(株)エスエスのなかひらゆたか中平等 穰氏に、「(株)エスエスのご紹介と竣工写真の現状」のタイトルで勉強会講師をお願いしました。



(株)エスエス 中平等穰講師の勉強会

(株)エスエスは写真家を数十人社員としてかかえ、全国展開している建築写真の専門会社です。竣工時期が3月末に重なる話や、外構工事に入居が始まり竣工写真の角度で四苦八苦する話などをお聞きできました。

情報開発部会と合同の勉強会は、JIAホームページで部会の日程を公開しています。勉強会への参加でも受け入れていますので、ご興味のある方は気楽にご参加ください。

新宿地域会

東京地域連携会議のあり方



新宿地域会
代表
小倉 浩

今年度、前代表より引き継いで以来行ってきた新宿地域会の活動と今後の活動の方向性は、下記のとりの進捗状況にある。

1. 会員増強のための名簿の作成と連絡網の整備は、メンバーリストの整備とメンバーの追加としてお膳立ては終了したが、若手の参加が今一つの出席状況であるので、次年度の課題と捉えている。
2. 建築設計専門家として行政への働きかけができるようにとの願いについては、その活動基盤である新宿設計三会を設立するため、まず建築士会新宿支部の設立に協力し、年度内に発足して目的を果たしたので、新年度より三会同会の会合を企画する予定である。
3. かねてより作成中の区内の建築マップ作成については、今年度内に印刷へ回し、新年度より各方面へ配布の予定である。「新宿建築100景」を2016年度に完成した後は、引き続き東京オリンピック2020の訪日客の役に立つよう英訳版の作成に着手する予定である。
4. 直下型地震への備えとして安全安心の地域社会構築と防災、減災への活動として行政との連携については、JIA新宿地域会の存在を認知してもらう必要があり、恒例的に行ってきた、区長室への新年のあいさつから一歩働きかけを進めた結果、区の公式行事へ



新宿区成立70周年
記念式典

の参加依頼、区が平成28年度に策定を予定している「(仮称)新宿区建築行政マネジメント計画」について、区の建築行政や施設管理についての意見提出を求められ、これに応えた。

5. 災害時の対応に、設計三会と連携して、建築家としての役割を担っていくことは、JIAの災害対策活動の延長上にあるが、JIA新宿地域会のメンバーの不足と年齢の高さは、自ずと活動分野に制限があるため、どの部分での協力と分担が有効かを模索していく必要があると考えている。
6. エネルギー消費を削減し地球環境に優しい建築の普及に努めるという課題については、新年度より施行される省エネ設計についての勉強会を、この分野の研究者である大野二郎前代表の協力を得て積極的に行っていきたいと考えている。
7. 今期、東京地域連携会議議長を順番制ということで新宿地域会が引き受けることとなったが、当地域会名誉代表の相田武文氏が初代議長を務めた発足当時を考えると、連携会議の存在意義とモチベーションが大分変わってきていると感じた。都下以外の他地域会がほぼ県を代表する立場であるのに対し、都全体を14に分けた地域会は県単位の地域会に比して人数も財源も少なすぎ、14地域会全体を代表した立場で都行政に相対していける機能もない。このような東京という特殊な事情の地域会を抱える支部として、今後の都下の地域会の方向性はどうかについて執行部での協議を望むところである。そして、地域サミットと連携会議との明確な位置づけが成されない限り、連携会議のメンバーのモチベーションは下がる一方という危機感を感じている。



新宿建築100景・マップ

文京地域会

NPO法人文京建築会の発足について



文京地域会・
NPO 法人文京建築会
代表
野生司義光

JIAの文京地域会は建築士会の文京支部と活動を共にし、事務所協会文京支部とも活動ごとに連携を行い、その活動の母体を文京建築会としている。

昨年の10月に文京建築会はNPO法人の認可を得て、「NPO 法人文京建築会」として活動を始めた。

■景観整備機構設立に向けて

来年度は、国交省の定める景観法に基づいた文京区の「景観整備機構」になるべく、「文京区の町並み景観保全」と「景観整備機構の設立」に向けて準備を行う。そのためにNPO法人の設立を行った。

「景観整備機構」設立に向けた「NPO 法人文京建築会」と自治体「文京区」との連携協働体制確立を目指して、町並みの景観修復・修景技術の実現化のために、景観資源の基礎調査を行い、良好な景観づくりに資する「景観整備機構(景観法92条～96条)」の指定申請に向けた準備を行う。

文京区内の旧江戸道に残存する歴史的近代建築物と歴史地理を保存・保全・整備していくためには保存修景学に沿った方法論を展開する。

■第7回文京・見どころ絵はがき大賞の開催

「文京・見どころ絵はがき大賞」も早いもので、今年で7回目を迎える。当初は多数の応募があるか大変心配をしたが、近頃は450通～500通の応募をいただいている。このイベントも、文京区を愛する人たちに広く認められ、そろそろ文京区に定着してきたことを喜んでいる。

■文京建築会ユースの活動

「文京建築会ユース」は「文京建築会」の若手の会として2011年に発足。地域の見どころしがちな魅力を掘り起こし、その価値を共有できるよう、さまざまな角度から発信・提案している。

2012年より文京区内にある地域の現存銭湯11件を全て取材し、「ご近所のぜいたく空間“銭湯”」展を開催。老朽化した銭湯の耐震診断や裏方の記録、建物調査なども行っている。2012年冬のクラウドファンディング達成を皮切りに、ドキュメンタリー映画「ご近所のぜいたく空間“銭湯”」も製作中。

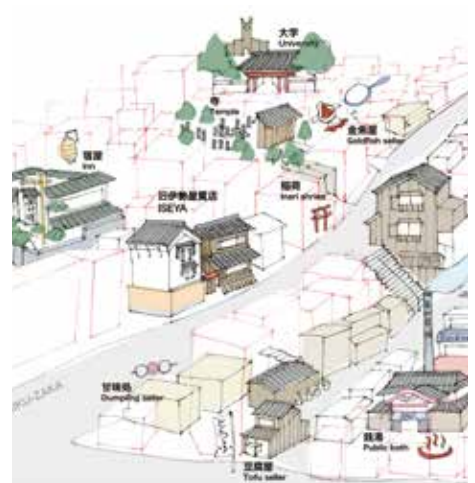
FORUM



「文京・見どころ絵はがき大賞」のポスター



「ご近所のぜいたく空間“銭湯”」展



地域の魅力を形づくる要素を可視化して魅力を発信

建築交流部会

前川建築と地方都市の力

建築交流部会
木村 智

新青森駅で奥羽本線に乗り換え、車窓には昨日までの寒波で降り積もった真っ白な雪の田園風景が広がり、車内から聞こえる津軽弁とも相まって、いやが上にもこれから訪ねる北都への旅の期待感が高まりました。

■前川建築の街

今回の「弘前：前川建築と近代建築めぐりの旅(11月26日～28日)」は、建築交流部会がコアになり、全体で20名近い方が参加しました。前川建築設計事務所に在席されていた建築家中田準一氏に講師、案内役をお願いし、また、地元JIAから建築家前田卓氏、弘前市役所まちづくり担当理事である盛和春氏にも現地案内をお願いし、参加していただきました。

市内には前川建築が8つあり、「市民病院」以外の「市庁舎」「市民会館」「市博物館」「市斎場」「市緑の相談所」「県立弘前中央高校講堂」「木村産業研究所」の7カ所を駆け足で回りました。それぞれ必要な改修を施しながら、極めて良好な状態で使われていることに、関係者の建物に対する尊敬と愛情を感じずにはられませんでした。前川がフランスから帰国後の処女作「木村産業研究所」(2004年国登録有形文化財)は27歳の時の設計で、ル・コルビュジエの影響が色濃く出ています。竣工後、凍害により損傷して撤去した正面バルコニーも、2013年の改修時に復元されました。内部は、2011年に前川建築を体験できる常設の博物館として開設。前川本人とその建築作品の全容が図面、写真、模型、年表等の資料でわかりやすく展示されていました。初日の最後に市民会館を見学し、2013年に行ったりリニューアル後の大ホールを見ることができたのは感激でした。夕食は前田氏の計らいで

市民会館内のカフェ「Baton」を借り切って懇親会としました。前川空間を独占して、BGMに包まれ、心づくしの酒肴を楽しめたのは、贅沢な体験でした。

■建築文化の^{るっぽ}増埒

弘前市内を回って驚いたことは、前川建築だけでなく、弘前城をはじめとする江戸期の武家屋敷(仲町伝統的建造物群保存地区)や最勝院五重塔(国重要文化財)、禅林街に連なる寺院、明治期の名工、堀江左吉をはじめとした職人達が創った和洋折衷型の洋風建築の力作の数々、伝道活動とともに創られた教会聖堂等、見る者を圧倒する建築が点在していることでした。弘前が維新後、積極的に西洋文化を取り入れた街づくりを推進してきたこと、戦災等の大規模な被害に遭遇しなかったこと、中央経済が入り込まなかったことで地元の歴史ある建物が解体の憂き目に合わなかったこと等が大きな理由として考えられますが、何より、市民の力がこれら建築文化に対して理解を示し続けた結果であったろうと感じました。

■食文化、工芸文化

2日目の昼食は、前々から楽しみにしていた弘前フレンチを堪能しました。弘前は人口あたりのフランス料理店数が日本一とか。市内に10軒ほどある店の中から、老舗の「レストラン山崎」を選定。敷居の高い扱いを受けている仏料理が、市民生活にカジュアルに定着しているのが店の雰囲気から伝わってきました。「リング冷製スープ」は初めての体験で、その色も味も見事であり、地元産の食材を使った料理の数々にも、創作に対するプライドとレベルの高さを感じました。また、初日に泊まったホテルの真正面にある津軽塗田中屋は、明治からの津軽



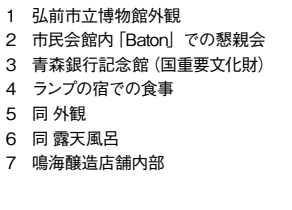
木村産業研究所外観



弘前市民会館大ホール



カトリック弘前教会聖堂内での集合写真



- 1 弘前市立博物館外観
- 2 市民会館内「Baton」での懇親会
- 3 青森銀行記念館（国重要文化財）
- 4 ランプの宿での食事
- 5 同外観
- 6 同露天風呂
- 7 鳴海醸造店舗内部

塗老舗であり、併設の資料館では工程見学も楽しめ、そのていねいな技の過程をつぶさに見せていただくことができました。店内に陳列されていた「こぎん刺し」と呼ばれる、麻布に木綿糸で緻密な幾何学的紋様を手刺しする地元工芸品にも、その美意識の高さに驚かされました。

初日夜は、津軽三味線を楽しめる居酒屋「あいや」へ。地元の前田氏、盛氏にご案内していただき、常連さんが席卷する怒濤の雰囲気飛び込み、ライブを楽しみ、地酒で大いに盛り上がりました。

■青荷温泉「ランプの宿」

2日目の宿である「青荷温泉」に行く途中に、菊竹清訓設計の「黒石ほるぷ子ども館」に立ち寄りました。夕刻4時過ぎですすでに夕闇に包まれていましたが、何組かの親子が楽しそうに本に囲まれて団らんをしている様は、この施設が地元の人々に愛され、地域に根を下ろしていることを物語っていました。菊竹建築では最小といわれていますが、その計算された寸法感覚とディテールにより、築40年経過しているにもかかわらず、陳腐さを感じさせない空間の緊張感が存在していました。

夜の帳が下り、「ランプの宿」です。急峻な山道を上り下りしてたどり着いた、雪に覆われた幻想的な一軒宿。静寂な闇にランプの柔らかい炎の明かりが誘う別世界でいただく地元の肴に舌鼓を打ちながらの談笑は、時が経つのを忘れさせるに十分でした。雪の中での凜とした佇まいの中での湯浴みも忘れられない思い出となりました。部屋の水回りに目立たないようにコンセントがセットされていたのは、ご愛敬でした。

■「小見世」の魅力

3日目は黒石旧市街の「こみせ通り」を散策しました。

「こみせ」とは、同様のものが新潟では「雁木」と呼ばれている歩道空間で、厳しい吹雪のあるこの地では、大切な生活装置として機能しています。江戸期からの姿がほぼそのまま広域に残されていて、日本の道百選にも選ばれているとのことでした。道沿いには、「鳴海醸造」や「中村亀吉酒造」といった造り酒屋や旧銭湯を改修して街の交流施設として再生した「松の湯交流館」など、楽しめる施設が準備され、これらを利用したイベントが日常的に開催され、街おこしの活動拠点として重要な役割を担っていました。

■地方都市に生きる矜持

弘前にしても黒石でも、現在の大部分の地方社会が抱えている過疎化、高齢化、地域経済の縮小化といった逆風環境の中、これに抗して社会全体で戦っている姿が強く見て取れます。先達が大切にしてきた生活文化、地域に根ざした人々の暮らしを尊重し、歴史、ストックを大切にすることは目を見張るものがありました。質の高い街並み景観に時間軸が加わり、奥行きのある社会空間を形作っています。市役所は増築やリファインを繰り返しながら、オリジナルの建物の良さを失わずに使われ続けています。

それに比較し、東京を含めた大都市圏は豊かで、社会経済活動に対する情報量にも恵まれていると思われませんが、同じ前川建築である「世田谷区役所」の行く末を議論している中での地元区民からの「盛り上がり」の低さに、戦慄を覚えます。豊かであることが公共的な物事への関心を脆弱にしているのでは、との危機感に駆り立てられます。日本が豊かになったことで、別な大切な何かを忘れ去ってしまったのではないかと感じた旅でもありました。



旧弘前市立図書館

黒石ほるぷ子ども館内部での集合写真

松の湯交流館と前面の「こみせ」

メンテナンス部会

マンションの大規模修繕
30年の軌跡

—JIA メンテナンス部会 30周年記念大会—

メンテナンス部会
部会長
今井章晴

「メンテナンス部会」は、当協会誕生の年に、技術部会が設置され、「メンテナンス分科会」を結成したのが始まりで、今年で30周年を迎える。部会活動の一環として毎月開催しているセミナーで、マンションメンテナンスの先駆者として歴代部会長にご講演賜り原稿にした。また、マンションメンテナンスの変遷を調べ整理し、『マンションの大規模修繕30年の軌跡』として編纂した。その発刊を記念し、2月8日「30周年記念大会」を催したところ、建築家会館1階大ホールが満員になる盛大な大会となった。

大会は「マンションに100年快適に安全に住まう方法」というテーマで基調講演を行い、続いて「マンション大規模修繕の軌跡」というテーマで、歴代部会長を迎えパネルディスカッションを行った。先駆者が取り組んできた歩みは、まさに改修技術との戦いであり、熱のこもった語りに会場の参加者は飲み込まれた。

1. 大規模修繕の始まり

先駆者の一人である三木哲氏は、1968年竣工の団地に築後6年目に引っ越した。当時の施工技術は発展途上で、外壁モルタルの剥落や、雨漏りなど、多くの不具合が生じていた。築後10年で瑕疵補修期間が切れることもあり、外壁塗装をすることになったが、予算をはじくと工事費が足りない。そこで、修繕積立金を1戸当たり1,000円から3,000円に値上げし、工事にこぎ着けた。杉丸太の抱き足場を架け、セメントリシンを水洗いし、エマルジョンペイントを塗り重ね、団地は見違えるようにきれ

いになった。大規模修繕の始まりである。ところが、翌年バルコニーの上裏や階段室腰壁の塗料がパラパラ剥がれてきた。バルコニー床のコンクリートが密実打設されておらず水をよく通し、上裏に塗った材料が剥がれることがわかった。さらに台風が追い打ちをかけ、あちこちの棟で漏水事故が発生した。塗装すれば大丈夫だと思っていたが、シーリングやひび割れ補修をしていないことに気がつき、止水防水の研究を始めた。

2. 阪神・淡路大震災

1995年1月17日阪神・淡路大震災が起きた。メンテナンス部会は調査隊を組織し、壊れたマンションを見てまわり写真に撮り、調査結果を持ち寄って『被災した集合住宅』という書籍にまとめ、4月に出版した。さらにこの本をもとにセミナーを開催したところ、大盛況で何回も繰り返し開催した。これらの活動が、建築家の仕事としてメンテナンスの重要性が認知されるきっかけとなり、メンテナンス部会に名称が変更された。

3. 大会を終えて

マンション改修の歴史を振り返ると、先駆者達は難問に直面しながらも改修方法を考え、実践してきた。多くの失敗もあったが、それを乗り越え経験として蓄積してきた。マンション改修のスキルを持つ建築家が、管理組合に寄り添いながらプロジェクトに取り組みれば困難は必ず克服できる。メンテナンス部会は、このような建築家を技術面・精神面で相互に研鑽し、支え合う場である。



30周年記念大会 盛況なセミナー風景



『被災した集合住宅』(1995年)



『マンションの大規模修繕30年の軌跡』

近畿支部における コンペ開催支援の取り組みと その効果



JIA まちづくり会議委員
近畿支部大阪地域会
荒木公樹

JIA近畿支部は、昨年、阪神高速道路株式会社が主催する「尼崎パーキング設計コンペティション」に運営事務局として携わった。当コンペでは、尼崎パーキングの改修にあたり、パーキングだけでなく周辺環境にも十分な配慮がなされ、利用者や地域関係者に愛され続ける施設整備について提案を求めた。応募作品86点の中から、最優秀賞には納谷学氏の作品「155mのえんがわ」が選定された。

また、近畿支部は、2008年に阪神総合レジャー株式会社とともにコンペ実行委員会を組織し、「JIA KINKI U-40 設計コンペティション 六甲山上の展望台」を主催した。当コンペの結果、事業主である阪神電気鉄道株式会社は、103点の作品の中から最優秀賞に選定された三分一博志氏の設計により「自然体感展望台 六甲枝垂れ」を建設、2010年に完成させた。

2つのコンペは、公益企業が主催、関係するものであり、JIA近畿支部はコンペ開催について実現支援する役割を担ったわけであるが、本稿は日本版CUBE(建築・まちづくり支援機構)の実現に向けた萌芽事例を通じた論考と理解いただければ幸いである。

コンペ開催支援の先にあるもの

コンペそのものの目的は優れた設計案を選定することにあるが、コンペの開催支援を通して生まれる連携とその効果について注目したい。コンペの開催支援は、「JIAの10の活動」のうち「5. 市民まちづくり、住まいづくり支援活動」に位置づけられ、「コンペ、プロポーザル、QBS等の設計者選定のノウハウや選定委員の推薦を行う」ことがうたわれている。これだけに留まらず、コンペでの協働をきっかけに行政、事業者、住民、市民との信頼関係を培い、その後が続く連携につなげることが大切だ。

一連の経緯の中では、数多くの地道な作業を伴うが、われわれ建築家の能力を発揮する場面として、設計与件の整理を挙げることができる。建築の発注者となる行政、事業者等は、限られた人材・労力のもと、コンペ実施の要となる設計与件の整理に取り組むこととなる。しっかりとした設計与件がなければ、設計・建設段階における時間や資源の浪費、完成後における発注者の期待とのミスマッチ、

非効率な運用・管理等、さまざまな問題が生まれる可能性が高い。このような問題を避けるために事前解決を図ることは、社会的に大きな意義がある。

良質な建築を実現するために、発注者が設計与件をまとめた企画書(ブリーフ)の作成の重要性が指摘されている。企画書の作成支援の場面において、われわれ建築家がその力を発揮することが想定される。コンペ開催者に対し建築家の力が必要だと理解してもらうために、これまでの実績を示さなければならない場面も予想される。そのためにも支部間でのコンペ開催支援に係る情報共有を提案したい。

JIAの将来に資するコンペ開催支援

コンペ開催支援は、JIAの人材育成・発掘につながる。「JIA KINKI U-40 設計コンペティション 六甲山上の展望台」は、開催によって69名におよぶ40歳以下の新会員の入会につながり、会員の高齢化、次世代への継承に悩みを抱える本会にとって、大変な朗報となった。当コンペをきっかけに入会した会員は、その後支部・地域会の委員会活動に携わり、現在ではそれらの中核を担う人材を輩出することとなった。参加者だけでなく、当コンペの運営支援には当時の兵庫地域会の若手会員たちが取り組んでいたが、彼らはその後兵庫地域会、近畿支部において重要な役割を担い、活躍することにつながった。

若手建築家ならびに学生を対象としたコンペは、次代の建築界を担う人材をJIAに巻き込むという観点で、とても大切だ。関東甲信越支部が昨年前橋市の中心市街地を舞台に主催した「ここにあるタカラもの 空き家空き地コンペ」は、非常に貴重な場であると深く感じ入った。正鶴を得た課題設定、市民・事業者・行政が参加する地域を巻き込んだ審査会等、人と人をつなぐ本来の意味でのまちづくりにつながる取り組みだと思う。

最後になるが、近畿支部に所属する私に執筆の場が与えられたことに感謝を申し上げるとともに、コンペ開催支援やまちづくり支援をきっかけに、関東甲信越支部をはじめとする全国の各支部と近畿支部との間で連携の機会が得られることを望んでいる。

くらしつづける街と建築へ

2016年 熊本地震 被害記録と提言

JASO 耐震総合安全機構 著

(株)テツアード出版
A4判、190頁
3,700円(税別)



阪神淡路・東日本大震災から熊本地震へ

1995年、阪神・淡路大震災が発生した。地震直後に設置された「JIA都市災害特別委員会」(池田武邦委員長)は現地調査を行い、建築が凶器となった被災地の惨状に強い衝撃を受けた。これを契機にJIA、JSCA、JABMEEという建築、構造、設備の各技術者集団を母体にして、1996年に耐震設計者連合(JARAC)が結成された。その目的は、「耐震設計を構造だけの問題と捉えず、建築や設備の総合的耐震性を高めることで生活者の視点に立ち、くらしつづける街や建築を目指そう」とするものであった。JARACは2004年にNPO耐震総合安全機構(JASO)として再編成され、今日までより広く活動を行っている。

2011年、東日本大震災が発生した。JASOはJIA防災委員会や、メンテナンス部会と共通するメンバーが多く、共同して被害調査団を結成し、5月初めから現地調査に入った。現地調査はその後にも継続され、復興の在り方を考えながら2016年の第13次に及んでいる。

そして2016年4月14日、16日に熊本地震が発生した。JASO有志は現地の状況から判断し、5月30日から第一次調査団、7月17日から第二次調査団を派遣した。メンバーは東日本大震災と同様に、JIA防災委員会、メンテナンス部会からの参加もあり、延べ29人となった。調査建物は70棟以上で、同じ建物を繰り返し見る機会をもった。今回、その結果の被害記録と提言を本書として出版した。

被害の差はどこからきたのか

熊本地震では、新耐震基準の建物に被害がそれほど見られない一方で、一部の地域や建物に大きな被害が見られた。その差がどこからきたのが我々のテーマとなった。そして、「地形と地盤、建設年代、低かった地域係数、建物の整形性、ピロティ、増築の仕方、木造の工法、連続発生型の地震、非構造壁(雑壁)の造り方」などの問題性がみえてきた。本書では各々について詳しく考察を行っている。また、地震前の耐震診断でIs値が基準を下回ったにもかかわらず、耐震補強がなされず使用不能

に陥った市町村庁舎も複数あった。一方で、補強工事がなされていて被害を軽微にとどめた庁舎もあった。ここには、自治体のBCPが全般には未だ浸透していない現実を感じた。また、設備の被害を調査し耐震基準の有効性を確認した。その半面、建物の崩壊により設備も破壊を免れない事例を見た。

まだ使える建物を無駄にしていないか

熊本地震でもJIA会員をはじめとして、専門家の応急危険度判定や現地相談の貴重な活動が行われた。しかし現地調査では、修復すれば再生可能と思われる建物を取り壊しに向かっている例がいくつも見られた。ここには応急危険度判定で赤紙(使用禁止)を貼られると、もう使えないと思う住民の誤解がある。さらに、そこに付け込む者もいる。本来は被災度区分判定を受け、修復の可能性を判断する必要がある。問題は被災度区分判定が被災者の有償調査であることだ。この判定に我々がより関与するべきであり、また費用の助成制度が必要である。適切な判定を経れば、傾いてしまった建物や非構造部材に大きな損傷を受けた建物でも、まだ再使用が可能である。本書では、そうした提言を行っている。

被害記録の活用

尊敬する構造家から、構造設計をするときに、その建物が崩壊する姿をイメージするとうかがったことがある。単に構造計算プログラムを回すだけの設計では不可能な能力である。地震災害は起きない方が良くことに違いない。しかし起きてしまった災害で建物がどう壊れたかを熟視することから、次の設計への教訓を得る義務が、我々設計者にはあると思う。7月の第二次調査時にはすでに取り壊されていた建物もあった。なぜ、貴重な教訓を得る機会を急いで失わせるのだろうか。疑問を覚える。そしてそのために、被害を記録した本書のような報告書が必要だ。少しでもJIA会員各位に活用していただけることを希望したい。

(2016年熊本地震 被害調査団 安達和男)

関東甲信越支部会報誌『Bulletin』季刊化のお知らせ

次号より、『Bulletin』は季刊発行となります。

これまで『Bulletin』は、隔月の定期発行号とアンニアル号を併せ年間7号を発行してきました。

関東甲信越支部広報委員会では、JIA本部および支部の経費縮減、誌面内容の充実、執筆が度重なる執筆者への負担軽減に配慮し、平成29年度は試験的に『Bulletin』を季刊発行することにいたしました。

新年度となる次号は夏号(7月中旬発行予定)となり、アンニアル号との合併号として発行します。その後は順次、秋号(10月中旬発行)、冬号(1月中旬発行)、春号(4月中旬)を予定しております。(諸事情により発行予定日は前後する場合があります。)

なお、『Bulletin』についてご意見ご要望がありましたら、事務局までお問い合わせください。

会員の皆様のご理解、ご協力をよろしく願います。

■ ご意見・ご要望受付、お問い合わせ先

JIA 関東甲信越支部事務局 大西
E-mail : mohnishi@jia.or.jp
TEL : 03-3408-8291 FAX : 03-3408-8294

近況、最近思うこと

- 思い立っても実行できていないことだらけな日々。春はスタート時期でもあるので、この春こそ実現したい。『Bulletin』5月号は、波の音をBGMに読んで…いるかなあ？ (浦)
- 春だからか、5月が生まれ月だからか、4月になる頃から気分は上向き。歳をとっても変わらないこの季節の気分、嫌いじゃないよ。 (倉島)
- 地元クリニックの定期検診で引っ掛り、総合病院の精密検査でステージ4の癌宣告を受け、驚く！定期検診の結果でも、何と4年前から毎年着実に～と言われ…絶句(怒)!! 近い身内の話である。 (高橋)
- 時間に余裕ができるとお酒を片手に映画を見る。無意識に選ぶ映画は宇宙もの。概ねジャイロ型宇宙船を見ていると、恥ずかしながら自分が携わる夢を見る。今年節目の40歳。 (小山)

編集後記

- 有り難いことに忙しく仕事をさせてもらっています。でも本当はきちんと住宅建築と向き合いたい一心で独立したので、立ち止まって考える時間を取るように日々努力します。 (長澤)
- 今回、私が直接編集に携わる「他人の流儀」の最後のゲストとして、雑誌『ソトコト』編集長の指出一正氏にお話をうかがいました。とても気さくな方で、「何でも聞いてください、何から話しましょうか?」と仰ってくださいる指出氏。質問に対して、言葉を選んで話すという感覚ではなく、瞬間的に論理的な思考で話が展開する「話術」に圧倒されながらも、とても面白いお話をたくさん聞くことができました。通常の頁枠を拡大して掲載しました。 (八田)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 高橋隆博
副委員長 : 八田雅章
委員 : 倉島和弥・小山将史・長澤 徹・中山 薫・上原和彦・吉田 満・清水裕子・浦 絵美
編集長 : 八田雅章
副編集長 : 長澤 徹
編集ワーキングメンバー : 倉島和弥・市村宏文・立石博巳・小山将史・中山 薫・浦 絵美
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 269 2017. 5
発行日 : 平成29年4月15日
発行人 : 浅尾 悦子
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 協進印刷

- JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
- ・ (公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
- ・ 建築家online (一般向け) <http://www.jia-kanto.org/>
- ・ JIA 関東甲信越支部 (会員向け) <http://www.jia-kanto.org/members/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2017



GOOD DESIGN AWARD 2016

BEST 100

LIXIL

Link to Good Living

アクアセラミックが、トイレに新世紀を告げる。

100年クリーン

水のチカラで、ずっと輝く

**AQUA
CERAMIC**

クリーン① トイレの汚れが、ツルンっと落ちる。

クリーン② リング状の黒ずみ、くすみとサヨナラ。

クリーン③ 新品時のツルツルが、100年つづく。*

LIXIL主力住宅トイレのすべてに「アクアセラミック」を展開

* 同一部位の摩擦回数2往復で年間365日お掃除した場合。お掃除ブラシで約7万回(100年相当)の往復を想定しています。

株式会社 LIXIL

お客さま相談センター ☎ 0120-179-400 受付時間：平日 9:00～18:00 土・日・祝日 9:00～17:00